

書 評

Raymond Firth. *Malay Fishermen: Their Peasant Economy*. London: Routledge and Kegan Paul, 1966. xviii + 398pp.

著者 Raymond Firth は1901年ニュージーランド生まれ、イギリス社会人類学界の指導者である。この書物は Tikopia に関する社会構造、経済、宗教の3部作<sup>1)</sup>を出版した後で行なわれたマラヤの漁村調査の成果であって、1946年に初版が出版された。Tikopia に関する著作が戦後の再調査によって改訂<sup>2)</sup>されたように、マラヤの漁民経済の本書も1966年に改訂版が上梓された。彼は経済人類学に関して、マオリ族を扱ったもの<sup>3)</sup>の外に、二つの論文集<sup>4)</sup>の編者でもある。従って本書を Firth の学問的体系より論究するか、または広く経済人類学における位置付けという観点

からも見る事ができる。しかし、本稿ではこの書物をマレー人村落社会研究に対する歴史の実証的な寄与とみなして、その内容の紹介および調査方法などについての考察をしたい。

人類学の本領は、Firth もたびたび述べているように、村落に入ってそこに定着し、研究対象とできる限り(最大限の)接触を保つことにある。こうしてデータを集めるために、W.H.R. Rivers の系譜法をはじめ種々の現地調査の技術が生みだされ改良されてきた。しかし、それでも人類学的現地調査は欠点を持っていると言われる。<sup>5)</sup> 第1の点は選ばれた「代表」が全体をよく表現しているかどうかということである。調査そのものが時間的・空間的に限定されているにもかかわらず、時間的・空間的に特定なものを普遍的なものを取り易い。この点に関しては Firth は村落内のレベルでは、できるだけ多くのサンプルを数量的・体系的に集めることによって単なる推測による説明を排除する。そして体系的に集めたデータを下から積み上げてゆくことによって、全体的な推計を行なう。したがって村落レベルから州あるいは地域全体のことを述べるのも、このような具体的な数字に裏打ちされた比較的确实なものとみなされる。さらに定着した村落がマレー人漁村としてどれだけ典型的なものであるかを知るために、東海岸における漁村を広く見て回っている。このことは後にもう一度触れるであろう。

- 1) *We, The Tikopia*, London, 1936; *Primitive Polynesian Economy*, London, 1939; *The Work of the Gods in Tikopia*, London, 1940.
- 2) 各々の第2版の出版年は1957, 1965, 1967年である。加えて *Social Change in Tikopia*, London, 1959; *History and Traditions of Tikopia*, London, 1961; *Tikopia Ritual and Belief*, 1967 が出版されている。
- 3) *Primitive Economics of the New Zealand Maori*, 1929 (2nd ed. as *Economics of the New Zealand Maori*, 1959)
- 4) R. Firth & B.S. Yamey (eds.), *Capital, Saving and Credit in Peasant Societies*, London, 1964; R. Firth (ed.), *Themes in Economic Anthropology*, London, 1967. その他に人類学一般を扱ったものとして *Human Types*, London, 1938; *Elements of Social Organization*, London, 1951, 論文集 *Essays on Social Organization and Values*, London, 1964 があり, *Man and Culture—an evaluation of the work of Bronislaw Malinowski*, London, 1957 の編者でもある。近代社会の親族組織の研究として *Two Studies of Kinship in London*, 1956 を編している。

5) *Malay Fishermen*, 1966, pp. 351-52; *Primitive Polynesian Economy*, 1965, p. 4.

第2の欠点と Firth が言うのは、心理学的な側面であって、調査者が観察とかインタビューの際によりどころとする体系的な方法が確立されていないことである。個人の性向、その人が取る理論的枠組、あるいは種々の選択そのものにまで偏見の問題が入ってくる。理論的には自分の立場(偏見)を明確に認識することによって、これを避け得るのではないかと筆者は考える。しかし、実際に村落で直接人々と接触交渉する時には、調査者そのものの存在がすでに人々にとって disturbance であるというハンディキャップを背負わされているので、簡単には解決がつかない。Firth の場合、支配者側からの人類学者として、いっそうの困難を増したであろうことが想像される。Firth のフィールド・ノートから引用されている会話の中で、マレー人が3度ほど Firth を“tuan”と呼びかけている所がある。もちろん Firth の人格・人柄に対する敬意ではあると思うが。

もう一つ人類学的な研究では「全体性」ということが言われるが、Firth は言及していない。例えば、有名な B. Malinowski のトロブリアンド島の研究のような、生活の全領域を包括的に理解しようとする立場である。漁村あるいは漁業の研究は、漁業経済学、法社会学(漁業権)、水産地理学、民俗学など多方面からのアプローチがあるが、人類学は漁村の全体構造をテーマとする点で、独自の領域を研究すると共に、それらの基礎学的な役割を果たすことが期待される。本書では、その副題が示すように漁民経済に的がしぼられている。家族などの問題は彼の妻によって別途に取り扱われているからである。<sup>6)</sup> しかし両書を合わせても、マレー村落社会の全体像からは程遠い。これは対象となる社会が比較

的複雑なので短期間の調査でもって、現在の人類学の要求するデータの緻密さと精確さとを満たすことができないからであろう。例えば、タイ領ではあるが、マレー人漁民からなる村落のモノグラフ Thomas M. Fraser, Jr., *Rusembilan: A Malay Fishing Village in Southern Thailand* (New York, 1960) をとってみよう。Fraser は Firth の研究が、「完全なコミュニティ・スタディ」ではないとして、Fraser 自身は全体的な社会=文化組織を描こうとしている。調査期間も調査パターンも、夫婦で村に入ったという点も、Firth 夫妻の調査と類似している。それにもかかわらず Fraser のほうは中途半端な形に終わっているのは<sup>7)</sup>、的のしぼり方が不十分であったと言えないだろうか。全体像を描かずに、ある特定の現象を取り扱っても「全体性」という視座は必ずしも失われないことは、Firth の著書によってよく示されていると思う。

Firth 夫妻のマラヤでの調査は合計3回行なわれている。第1回は1939年から40年にかけての約12カ月間である。初版はこの調査の成果であり、第2版でもこの期間に得られたコミュニティ・スタディの結果はそのまま残されて、手を加えられていない。この12カ月の調査は4段階に分けられる。(1)最初の2カ月はクランタン州、トレンガヌ州沿岸の一般的サーベイ。(2)次の8カ月は集約的定着調査。(3)再びトレンガヌ州、パハン州沿岸の主要漁港における漁船、網、分配法等々の調査に1カ月。(4)最後の1カ月間は半島西岸部の比較サーベイである。夫婦で共同調査

6) Rosemary Firth, *Housekeeping among Malay Peasants*, London, 1943. (2nd ed., 1966).

7) 『東南アジア研究』1巻3号, pp. 107-8, 筆者による同書の紹介参照。なお、アジア・アフリカ文献調査報告第51冊(教育7)(1964)で *Rusembilan* をレビューした松永和人も、漁業と農業との全体的経済構造、マーケットとしての“Pattani”との関連、ボート集団の具体的な提示等の欠如を指摘している。

をするのは調査対象ごとに分業で働き得るので、とくにムスリム社会などでは有効である。(本書 p. 358)

第2回は1947年に約2週間ほど、1940年に定着調査した村を訪れている。<sup>8)</sup> 第3回は1963年に約6週間、同村で再調査をした。この時は第1回の対象母体の約半分を対象として、同様な統計を得て、変化の実態を数量的に跡づけており、単なる印象による記述ではない点は評価されるべきである。

第2版は、したがって、時間的経過(23年)をおいた同地域の考察という点で貴重である。その上に第1版がそうであったように、第2版もまた、マレー人漁村の生産、マーケティング、分配の詳しい分析をした唯一のモノグラフであるという価値を持っている。マレー人村落社会を取り扱ったモノグラフは、Fraserのほかに、Judith Djamour<sup>9)</sup>、M. Swift<sup>10)</sup>、P. J. Wilson<sup>11)</sup>、Tjao Soei Hock<sup>12)</sup>、Syed Husin Ali<sup>13)</sup> などがあり、人類学的現地調査をしたのは D. Lewis<sup>14)</sup>、H. Strange、William

Wilder<sup>15)</sup>、Abdul Kahar Bador、Manning Nash、Rosemary Barnard、R. A. Jay、R. Downs<sup>16)</sup>、などがある。<sup>17)</sup> 日本の研究者では、口羽益生(竜谷大)、坪内良博(京大)、堀井健三(アジ研)、景守豊(大阪市大)などが最近調査を行なっている。たしかに Firth の言うように、彼の著書に匹敵する漁村のモノグラフは出ていないが、シンガポール大学、マラヤ大学の経済学部学生の中には卒業論文のために漁村調査をするものもいる。<sup>18)</sup> また政府機関である Federal Agricultural Marketing Authority では最近とくに魚のマーケティングに関心を増している。<sup>19)</sup>

本書の構成は11章と付録から成る。3章から10章までの主体となる部分は、1939年から40年にかけてのクランタン州バチョッ(Bachok)郡のプルポッ(Perupok)地区と仮称する数部落の集まりの一部(世帯数331、人口1,301人を調査の対象とする)の集約的調査の結果であって、第1版も第2版も変わら

- 8) 同年のマラヤ訪問(約3カ月間)については、*Report on Social Science Research in Malaya*, Singapore, 1948 として報告が出されている。
- 9) *Malay Kinship and Marriage in Singapore*, London, 1959. アジア・アフリカ文献調査報告第32冊(民族2)(棚瀬襄爾, 1964)参照。
- 10) *Malay Peasant Society in Jelebu*, London, 1965. 『東南アジア研究』3巻5号, p. 175, 坪内良博による紹介参照。
- 11) *A Malay Village and Malaysia—Social values and rural development*, New Haven, 1967. 『東南アジア研究』5巻2号, p. 198, 坪内良博の紹介参照。
- 12) *Institutional Background to Modern Economic and Social Development in Malaya—with special reference to the East Coast*, Kuala Lumpur, 1963.
- 13) *Social Stratification in Kampong Bagan: A Study of Class, Status, Conflict and Mobility in a Rural Malay Community*, Singapore, 1964. 『東南アジア研究』3巻3号, pp. 203-204, 坪内良博の紹介参照。
- 14) “Inas, a study of local history” が *JMB-RAS* に掲載の予定。

- 15) “Islam, Other Factors and Malay Backwardness: Comments on an Argument,” *Modern Asian Studies*, Vol. II, Pt. 2 (1968), pp. 155-64.
- 16) A Kelantanese Village of Malaya, in J.H. Steward (ed.), *Contemporary Change in Traditional Societies*, Vol. II. (1967), pp. 105-186.
- 17) Elise Tugby, “The Distribution of Ethnological and Allied Fieldwork in Southeast Asia, 1950-66,” *Current Anthropology*, Vol. 9, No. 2-3 (1968); *Man in Southeast Asia*, No. 4 (1969), University of Queensland.
- 18) T.H. Silcock (ed.), *Readings in Malayan Economics*, Singapore, 1961. 参照。
- 19) FAMA Deputy Director, A. Aziz Yassin 氏からの話(1968年)。なお FAMA の雑誌 *Review of Agricultural Economics Malaysia* には、Low Wan Kim, “Fish Marketing in Malaysia,” Vol. I, No. 1 (1967), pp. 28-33; G.R. Elliston, “The Role of the Middlemen in the Fishing Industry of West Malaysia,” Vol. I, No. 2 (1967), pp. 16-33. などの論文がある。後者はとくに仲買人の分類を目指した好論文である。

ない。

Perupok は19世紀後半までは農主漁従の内陸集落（海辺地方）であったが、1920年代から1930年代にかけて漁主農従あるいは専漁業の漁家が海岸部に浦方集落を形成したものである。人口のほとんどはこの土地で生まれたマレー人から成る等質的な社会で、他出の傾向も見られないという。成人男子の約75%が漁師、10%が魚商人である。漁業そのものが交換経済的性格を有しているため、必然的に内陸後背地との交渉、海岸線沿いの交渉など外部との経済的関係が常に存在する。特に注目されるのは女性の経済的地位が高く、漁具などへの投資に関しても大きな影響力を与えするという。（p. 80, p. 128, p. 144）

Perupok では8種類の漁法が行なわれているが、どの漁法を採るかは（1）季節風などの自然的条件、（2）生産高と資金とによって支配される経済的條件、（3）人の気持、親類、友達関係などに左右される社会的条件、などによって決定される。

もっとも盛んに行なわれるのは四ツ張網（pukat takur）で、5隻の船が必要である。親にせ餌を使って魚群を集めておき、魚群が集まっていれば、4隻の船は網を張って待ち、他の1隻はその親にせ餌を沈めて、今度は子にせ餌を繰り出し魚をおびきよせて網を上げる。このにせ餌を扱う船には juru selam（もぐり師）と呼ばれる漁の熟練者が乗っており、魚群の種類や大きさの判定を水の中に潜って音で判断し、全体の指揮をとる。魚を捕えると、こんどはこれを陸に運ぶ船が必要になる。これは魚商の船（perahu peraih）と呼ばれる。

juru selam というのは、この網漁の中心人物で、しばしば網グループの主たる資本を出資している。彼が漁の計画、組織、漁の指揮を行なう。彼のグループに沢山人が集まるかどうかは、彼の網の生産高によることが多

い。彼と船子との関係はリーダーシップの力によって結ばれていて、一定の契約関係がないからである。いっばんに網グループの成員は、中心となる船主とその親戚、親友、近隣者などの中核を除いて、メンバーの出入りが激しい。また網グループに参加する船も、同一シーズン中でも、出ていったりする。（第4章、漁業活動の計画と組織）

船、網、漁具などに投下される資本は、漁師一人あたり約55マラヤ・ドルと計算されている（p. 132）。船を所有している漁師は33%、網を所有しているのは約60%である。資本投下の個人差、資金のやり繰り、漁具製造および維持費、網製作の企業などに第5章の残りがついやされている。

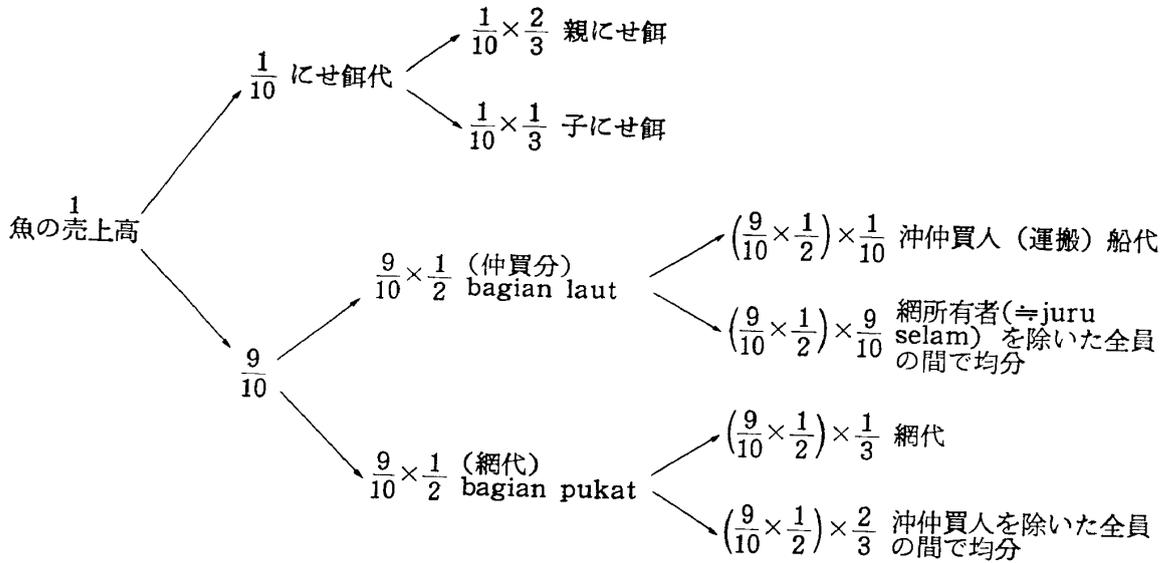
第6章は信用制度がどのように利用されているかについて、利子のつかない貸借、金利のつく貸借、担保の用益権という形で利子を払う借金などが記述されている。

市場制度（第7章）は、専業漁家にとってはもっとも重要なことである。仲買人は沖仲買人と浜仲買人とにわけられ、沖仲買人は網グループと一緒に出漁して、運搬船の役を果たすわけである。浜仲買人は、まずその人数が過剰であり、出入りが激しく、兼業が多いことが特色である。卸売仲買人の外に、魚行商人（てんびん棒、自転車）、小魚商も水揚げされた魚の売買に参加する。

漁獲の分配方法（第8章）は、いろいろな要因があって複雑であるが、四ツ張網の場合の原則は図のように歩合制である。これに役付き代とでも言うべき特別配当が加わったり、家庭消費のための配給をしたり、分配率が網元によって変えられたりする。網を持っている juru selam は（にせ餌も彼の責任なので）20～35%の配当を受け、運搬船主は約6%、普通の船子は一人当たり約2%の均分配当ということである（p. 246）。

第9章は、市場値段から逆算された漁業平

図 漁獲物の分配方法



均純収入とその個人差が推計されている。第10章は約1/3強の兼農漁家などの副収入をもいれて漁家の生活水準全体を考察している。1910年頃から40年までの30年間に貧富の差が広がってきていて、階層分化が教育面などに現われてきているとしている。

この集約的調査のデータは、Firth 自身が毎日、漁に行く（各漁法毎の）船の数、船子の構成、水揚高をたんねんに記録していった集められたものである。6カ月間とはいえ、これだけの記録を正確に集めるのは並大抵ではない。その上に、漁家経済を知るために、222筆の水田の稲作生産高、64区画の野菜生産高、10世帯の家計などのサンプル調査と、331全世帯の経済全般にわたるセンサスをも行なっている。これらのデータを使っての積み上げ方式による逆算の仕方は、まことに着実だと言わざるを得ない。

以上が、本書の核をなし、かつ初版、改定版を通じて不変の部分である。次に改定を加えられた第11章および巻頭の2章について触れておく。

第11章は初版では「漁業の発展とマレー農

民」と題されていたが、第2版では「近代的発展—23年後の再調査」とされている。1947年には四ツ張網の分配方法が網元に有利なように変わる徴候はあったが（1/3から1/2へ）、全体として技術的な変化もなく戦前とあまり変わらなかったと言える。

ところが1963年には、発動機と氷とが村人の意思によって導入されて、生産、市場状況をともに大きく変えてしまった。機船漁業は従来の四ツ張網を衰退にやり、漁灯を使用する巾着網漁を盛んにした。このため生活のサイクルがくるい（例えば昼漁から夜漁への変化）、マーケティングの方法も変わり、従来の浜仲買人に代わって大規模な資本家的魚商人が出現しだした。そしてこれら企業者（マレー人）と他の漁師との格差はますます拡大することになる。1940年には、装備に対する経費は全収入の10%、資本（船、網）に対する還元は27%、労働報酬は60%であったのが、1963年には、各々25%、30%、40%となっている（p. 323）。

このようにマレー人コミュニティの内部での階層分化が、企業家（orang kaya）と残り

の村人との間でいっそう進行していつていると言う。この地区では、中国人が直接漁業に介入してきていないのもその促進原因の一つではなかろうか。

さて、本書の最初の章は、漁業経済とマレー村落社会と題して、“peasant”の特質、あるいは漁民と農民との相違などを述べている。注目すべきは、「イスラームは例えば1940年よりも1963年のほうが漁師の生活の中でより顕やかで形式的な役割を果たしている」(p. 12)という指摘である。この点は、1963年の調査時期が、マレーシア独立後最初の総選挙の前であり、その総選挙で全マレーシアイスラム党が勝ったというクランタン州の事情も考慮されるべきであろう。

漁師の収入は戦前と比べてみても、その経済的地位はゴム採液労務者と変わらない低所得者層にある。一方では鮮魚の需要などが増し、漁師1人あたりの生産高も増加しているにもかかわらず生活水準が低いのは、生産高における格差がいっそうひらいていて、低い生産者は戦前とあまり変わらない生産性を維持していることと、また、たとえ生産性が質量ともに向上しているとしても、マーケティング制度が魚商人に統制されている場合は、魚商人による搾取が増加するだけのこともあるからであるとFirthは言う。

第2章は、海岸線の長いトレンガヌ州と、海岸線が短く後背地の豊かなクランタン州の漁業経済全般(漁業人口、漁獲量、船、漁具、資本、金融など)にわたる比較である。船、漁具の図解、漁撈技術の解説など、テクノロジーの領域に入ることも詳しく記述している。

人類学者の常として定着した村だけを抽出してしまうことが多い。この点Firthは、村落とより大きな国家とを結ぶ中間項として地域全体の概要を述べていて、読者にとってはまことにありがたい。微視的な村落調査の結果が、どの程度一般化しうるかを推察できる

からである。しかし、村落調査と全然関連のでてこない国家レベルの統計などを継ぎ足しても意味がない。(この悪例は前掲Tjao Soei Hock, 1963)。少なくとも、村落を含む広域の地域社会における調査村の位置づけが読者にわかるようにしたいものである。この点、Firthの著書の第1章と第2章は、一見重複するような点もあるが、今後の調査報告の例として有益である。

もし読者がマレー人の村の中に沈潜していくつもりでこの書物を手にすれば、非常に興味ある本である。随所にフィールド・ノートからの素材がもりこまれている。実際の事例、調査時の会話、調査上の困難などが、そのまま読者に提示されているわけである。これは逆に言えば、せっかちな読者にとってはまことに読みづらいものであろう。ともかく、根気の良いデータ集めには、ただ頭を下げるしかない。調査期間が比較的短かったせいもあって、調査のし残しが目につく。(例えば夫妻間における財産の分布)。これも不明の所ははっきり不明と書いてあるから余計気になったのかもしれない。

decision-makingにおける要因を究明する時に、「社会的」要因に、しばしば心理学的な要因が暗に含まれていることがある(前述、漁法の選択条件参照)。心理学的要因を「体系的」に分析の中に取り入れるか、取り除く必要があると思う。全体として、この書物は基礎的な知識として蓄えられるべきで、これからが社会学的<sup>20)</sup>、人類学的、経済学的な分析の始まる点ではないかと思う。

(前田成文・東南ア研)

20) 山岡栄一『漁村社会学の研究』1966。河岡武春「マラヤ漁村にかんする覚書」『アジア経済』10巻5号(1969年5月) pp. 69-82 参照。